

多言語管理の方略としての通訳

上智大学外国語学部・木村護郎クリストフ

通訳は、多言語状況における言語管理の主要な方略の一つであるが、社会言語学において、通訳コミュニケーションがこれまで十分に研究されてきたとは言いがたい。たとえば、異言語話者間の言語的媒介の諸手段を考察する媒介言語論において、通訳はしばしば言及されるものの、研究の中心は共通語などの直接的なコミュニケーションにあり、通訳に焦点をあてた研究はほとんどなされてこなかった（木村・渡辺 2009）。また、異言語話者間の接触場面をとりあげてきた言語管理研究においても、通訳を介したコミュニケーションをとりあげた研究はみられない。一方、通訳研究においても、通訳を他の媒介手段との関連で考察する発想や言語管理の一環としてとらえる視点は希薄である。

そこで本報告では、通訳という手段の特徴を他の異言語間コミュニケーション手段との比較において明らかにすることをおして、通訳を多言語管理の中に位置づけてみたい。その際、多言語管理の諸方略に関する議論が蓄積されてきたヨーロッパでの議論や事例をもとに考える。ヨーロッパでは、次のような手段が主に議論されてきた。

表 ヨーロッパにおける異言語間コミュニケーション手段

主要な手段	代替的な手段
英語の使用	計画言語の使用（エスペラント）
単一の当事者言語使用	相手言語の相互使用（言語交換）
<u>言語的な仲介（通訳）</u>	受動的な多言語使用

※実際には、複数手段の組み合わせや、言語混合がみられる。本表はあくまでも概念的な分類である。

表にあげた6つの手段の中で、通訳（および翻訳）のもっとも基本的な特色は、言語的な仲介を経るため、当事者の異言語学習を要しないということである。単純に考えると、異言語教育と通訳の使用は反比例の関係にある。すなわち、異言語教育が進展すると通訳の需要が低くなる。しかし現実にはより複雑である。ヨーロッパでは、異言語教育が進展する一方で、言語的仲介への需要もかつてない高まりをみせている。直接的コミュニケーションの諸手段と仲介を介した間接的なコミュニケーションとしての通訳は、どちらか一方に収れんするものではなく、補い合うものとしてとらえる方が妥当だろう。その背景には、それぞれ異なる長短をもつということがある。

では、通訳の長所と短所はどこにあるだろうか。本報告では、ヨーロッパの事例、とりわけ「ヨーロッパで最も鋭い言語境」と言われるドイツ・ポーランド国境地域における調査をふまえて、費用、時間、人間関係、異文化理解などの観点から考えていきたい。通訳は費用や時間がかかり、直接に人間関係を築く妨げになり、当事者の異文化理解をもたらさない、といった、通訳の短所としてあげられる特性が、裏を返せば長所にもなり、通訳という手段が他の手段で代替できない背景となっていることについて考えていきたい。